「夏そば」と「秋そば」に向く品種の違い

野菜花き試験場

長野県はそば処として全国的に有名で、「信州そば」ブランドは多くの消費者に知られています。長野県のソバの生産量は北海道に次いで全国２位で、長野県の主力品種「蕎麦信濃１号」が作付けの約 75%を占めています。「蕎麦信濃１号」など、夏まきで秋（10 月）に収穫するソバを「秋そば」と呼びます。一方、春まきで夏（７月）に収穫するソバは「夏そば」と呼ばれ、県内では長野県で育成した「しなの夏そば」や、北海道の「キタワセソバ」が主に栽培されています。

「蕎麦信濃１号」など「秋そば」向きの品種を春まきすると、草丈が伸びて花がいつまでも咲き続け、収穫適期の判断がつきません。また、結実率も低くなるため、夏まきの３分の１ほどしか収穫量がなくなってしまいます。これは品種によって日長に対する反応（生態型）が違うためです。生態型は「夏型」、「中間夏型」、「中間秋型」、「秋型」の４つに分けられ、長野県で春まき栽培が可能なのは「夏型」と「中間夏型」の品種に限られます。「しなの夏そば」と「キタワセソバ」は「夏型」ですが、「蕎麦信濃１号」は「中間秋型」のため、「夏そば」としての栽培は難しいのです。

一方、「夏型」の品種を夏まきすると、収穫適期が早すぎることが問題になります。そこで野菜花き試験場では、「夏そば」と「秋そば」の二期作が可能な「中間夏型」品種の開発を進めています。現在育成している新品種候補は倒れにくく、品質、収量とも既存の品種より優れているため、ソバの増産や品質向上が期待されています。

「中間夏型新品種候補」の花

茹で麺の様相

担当者	丸山　秀幸	電話番号	０２６３－５２－１１４８

試験場ニュースへ